

公開セミナー「グローバル時代の女性のちから」を終えて

森 あおい

2014年度公開セミナーは、「グローバル時代の女性のちから」をテーマに、10月28日、11月4、11、18、25日、12月2日の各火曜日の計6回にわたり、16時45分から18時15分まで横浜キャンパス7号館720教室で開催された。国際学部教員を含む7名の講師が、「女性」をキーワードとして、ジャーナリズム、政治、身体、医療、文化というさまざまな視点から講演を行った。

第二次世界大戦後、女性の権利の保障と擁護は、国際連合の主要活動の一つとして捉えられ、日本政府も男女共同参画社会の実現のために様々な方策を講じてきた。1979年には国際連合において「女性差別撤廃条約」が採択され、日本では1984年に男女雇用機会均等法が制定されたが、いまだに、女性に対する差別や暴力が後を絶たない。また、世界経済フォーラムが毎年公表している世界各国の男女格差を示すジェンダーギャップ指数によれば、2014年の調査対象となった142カ国中、日本の順位は、経済活動の参加と機会が102位、教育が93位、健康と生存が37位、政治への関与が129位となっており、総合では104位である。その驚くべき低さは、日本がいかに経済面でのグローバル化を推し進めようとも、真の国際化社会とはほど遠い状態にあることを露呈していると言えるだろう。

女性差別がなくならない中、積極的に女性の立場で活動し、また男女に関わらず、女性の力に注目して発信している人々はとても頼もしい存在である。今回のセミナーでは、平等な社会を求めて、グローバルな視点で活躍・発信している女性の「ちから」について、講師の方々の話をもとに、聴衆とともに考える機会となった。各回の概要は、以下の通りである。

第1回 10月28日

第1回目は、朝日新聞社論説委員の大久保真紀氏に、「取材で出会ったアジアの子どもと女性たち」という演題で講演いただいた。大久保氏は、朝日新聞社の社会部記者として、中国残留邦人、子ども虐待、アジアの子ども買春の問題等の報道に携わってきた。著書『児童養護の子どもたち』は、居場所を失い、自分を表現する言葉を奪われた少女たちの声を綴った貴重なルポルタージュである。講演では、著書『子どもの権利を買わないでーブンとミーチャのものがたり』をもとに製作された映画上映のあと、大久保氏がこれまで取材してきたアジアの少女たちと買春の問題を明らかにし、彼女たちが性的搾取を受けながらも前向きに生きようとする姿を伝えた。

第2回 11月4日

第2回目は、国際公共政策を専門とする法学者で大阪国際大学准教授の谷口真由美氏に、「女性が輝く社会とは？」という演題でお話いただいた。谷口氏は、2012年にプラットフォーム「全日本おばちゃん党」をFacebookで立ち上げ、「おばちゃんたちの底上げと、オッサン社会に

愛とシャレでツッコミをいれること」を目的として活動し、テレビや新聞等のメディアでも積極的に発言している。講演では、「おばちゃん」目線で集団的自衛権や秘密保護法に言及しながら「オッサン」政治に鋭く斬り込み、パワフルながらもユーモアを交えた関西弁の語り口で、現安倍政権の男性中心的な政治の問題点を検証した。

第3回 11月11日

第3回目は、「プロレスができる身体が獲得したもの—現役プロレスラーの語りから—」というタイトルで本学国際学部教授の合場敬子氏が、プロレスラーの上林愛貴かんぼやし あき氏とのインタビューを交えながら講演を行った。合場氏の専門は、身体とジェンダー、女性に対する暴力、ジェンダー論である。著書『女子プロレスラーの身体とジェンダー—規範的「女らしさ」を超えて』は、娯楽の対象として見られることが多い女子プロレスラーの身体に着目し、「女らしさ」の基準を考察している。講演では、合場氏と上林氏との対談を通して、社会が求める「女らしさ」の意識の変遷と、身体を鍛え上げた「強い女性」の存在が明らかにされた。

第4回 11月18日

第4回目は、本学国際学部教授の原武史氏に「皇后とはなにか？」という演題でお話いただいた。原氏の専門は、日本政治思想史、近現代天皇制、戦後社会論で、著書に『「民都」大阪対「帝都」東京』（サントリー学芸賞）、『大正天皇』（毎日出版文化賞）、『滝山コミュニオン 1974』（講談社ノンフィクション賞）、『昭和天皇』（司馬遼太郎賞）、『皇后考』（講談社）などがある。講演では、綿密な調査に裏打ちされた皇后論が展開された。原氏は、明治以降に近代化を進める日本国家が創り出した男性中心的な万系一世の天皇制の再考を促す資料を提示し、女系天皇を否定しようとする歴史に抗って、自ら行動した逞しい皇后の存在を浮き彫りにした。

第5回 11月25日

第5回目は、小児科医で世界の医療団の一員として海外で医療活動に携わった経験を持つ赤羽桂子氏に、「世界のどこで、なぜ、子供たちは命を落としていくのか—アフリカでの医療活動の経験から—」という演題でお話いただいた。医療体制の整備が遅れた国々での人道支援に関わった赤羽氏は、エチオピア滞在中に武装ゲリラに誘拐され、命が脅かされる経験もしている。しかし暴力に怯むことなく、開発途上国で母子を守る活動の重要性を説いている。海外を拠点として活躍している赤羽氏は、夫のロロ氏と一緒に、2歳になる長男と生後5ヶ月の次男を連れて、里帰り中の福岡から当セミナーのため戸塚まで駆けつけてくれた。赤羽氏の講演中に、おんぶ紐で次男を背負い、長男をあやしていたロロ氏の姿は、まさに「男女共同参画」のお手本であった。

第6回 12月2日

第6回目は、本学国際学部教授の高橋源一郎氏と大岩圭之助氏が、「弱さの思想と女性のちから」について対談を行った。高橋氏は、作家、評論家であり、『優雅で感傷的な日本野球』で三島由紀夫賞、『日本文学盛衰史』で伊藤整文学賞、『さよならクリストファー・ロビン』で谷崎潤

一郎賞を受賞している。文化人類学者の大岩氏は、ナマケモノ倶楽部世話人で環境運動家でもあり、著書に『他力・自力のしあわせ論』、『降りる思想』などがある。また、アジアの環境運動家のインタビューから成る DVD ブックをシリーズで刊行している。両氏は、2010 年から 2013 年にかけて付属研究所の共同研究「弱さの研究」に取り組み、その成果は、『弱さの思想—たそがれを抱きしめる—』にまとめられている。対談で両氏は、「弱さの強さ」という、いわば逆転の発想に基づいて隠れた女性の活躍に触れながら、「弱さ」が持つエンパワメントの可能性について、真摯にまたユーモアを交えて語り合った。人類は、2011 年 3 月 11 日に東北地方を襲った大地震以降、科学技術の脆弱さ、自然の威力を前にしたときの人間の弱さを思い知った。しかし、むしろその弱さに持続可能な社会を構築する手がかりが隠されていることを示唆する対談であった。